

嘘のような本当の話（5）

今年10月某日、古希を過ぎた位の男性が来店され「父が残した切手類です。オークションに出品できますか?」。多くはオークション向きではありませんでしたが、私の短いキャリアの中で見た事がない逸品と思われるカバーがありました。竜1銭・半銭貼帯封です。御本人も入手経路は御存知ありません。色々とお話を聞いたところ御父様は戦後関西郵趣連盟の結成当時より御活躍されていた内の御一人と確認できました。人の生命は有限ですが、収集品は是非継承されるべきと強く感じました。

嘘のような本当の話（6）

～クリスマスの贈り物～

今年の11月下旬、大阪北部の中企業の社長様から切手の御処分の御電話がありました。御年93才になられて終活を考えておられるとの事。12月会社に査定見積りに伺うことになりました。約70年間こつこつと集められたアルバムを会社の会議室でベテラン秘書さん、数名の屈強な男性社員の見守る中（お宝鑑定団ちゃうで!）見積りを始めました。オークションで出品したい様な心ときめく品物は残念ながら確認できませんでしたが、最近まで熱心に収集された品々が拝見できました。

一発勝負の「査定見積り」と思い、その場でしばし熟考し「〇百万円でいかがでしょうか」と迷わず提案したところ、予想外に「そんなに要らない。一桁減らしてくれ」と言われ、こちらも多いに困惑しつつ「そんな訳にはいきません。ビジネスとして成り立つ金額を出させて顶きました。〇百万円で御願います!」「でも要らない」と押し問答の末、結局先方が折れて下さり「それならあなたの提示額の半分で引き取って下さい」。心中手で十字を切って、その手を合わせましたが（キリスト教徒でも仏教徒でもありません）苦渋に満ちた表情で「そこまで仰るのならその額で引き取らせて頂きます」。この商いで何とか年を越せそうです。

金坂 忠彦